



第二十二卷 第二號

(通卷第八十六號) 昭和十二年四月發行

研 究

近 世 文 化 と 窄 人 (上)

栗 田 元 次

目 次

- 一、窄人の文化に貢獻せる因由。
 - 二、儒學と窄人。
 - 三、史學と窄人。(以上本號所載、以下次號)
 - 四、地理學と窄人。
 - 五、醫學本草學と窄人。
 - 六、文藝と窄人。
 - 七、附 言。
- 一、窄人の文化に貢獻せる因由

茲に窄人と言ふのは平安時代・鎌倉時代等に見ゆる浪人、即ち本貫の地を離れた浮浪人ではなく、從來の地位を失つて落魄した窄籠人を意味し、且近世の一般の用例に従つてこれを主を離れ、祿を失

つた武士に限る。^①近世初期には武士の失業者たる牽人が非常な多数に上つた。當時牽人の生じた原因は主として幕府の政策と社會的風尚に基くもので、前者は大名の改易と切支丹の禁制であり、後者は戰國氣風の遺存である。大名の改易によつて生じた牽人のみでもこれを内輪に見積つて關ヶ原陣の結果が約十五萬人、その後三代家光の代までの分が約二十二萬人で、併せて約三十七萬人に達する。大阪陣による牽人は多く牽人の入城者であり、戦死者及び戦後に殺されたものも夥しいからこの中には數へてない。戰國氣風の遺存は殺伐なため争闘が多く、當事者のみならず一族まで牽人たらしめたことと、大名からの改易、追放も家臣の立退も餘り重く見られず軽々しく行はれ、葉隠聞書には「七度牽人せねば誠の奉公人にてなし」とまで言はれた程であつたことが數へられる。切支丹の禁制が信徒を牽人せしめたことは言ふまでもないが、これに基く寛永十二年の異國渡海の禁令は、これ等の牽人の海外進出を不可能たらしめたから、必然の結果としてこの多數の牽人を國內で處分せなければならぬこととし、社會問題としての牽人の意義を益々重大ならしめたのである。^②

當時の武士は政事と軍事とを本務とし、文武の教養ある儀表的階級であるから、一般牽人の望む所は再び主取してその本務に復し、名譽と權力と利益とを併せ收むるにあつたことは言ふまでもない。併し戦亂が續き大名の地位の動搖して居た際には、腕に覺あるものは至る所に青山を見出し得たけれども、社會が平和になり、大名の地位が安定して來ると共に、牽人の就職が漸く困難になるのは免れ

ない數である。されば窄人に取つては平和の確立は不況の深化であり、事變の發生は景氣の到來であつて、社會の平和安定を治政の眼目とする幕府とは全く對蹠的な立場にある。大阪陣に際し、十萬に近い窄人が大阪に集まつて、大部分は入城し、一部は東軍の陣場を借りて從軍したのも、島原の變に際し多數の窄人が寄手の陣にあつて大名の家臣以上の奮闘をしたのも、如何に彼等が事變を望み、戦功を立て、主取の機會を得んとしたかを示して餘あるものである。即ち再び主取せんと念の強いもの程、事變を望むことも切なる譯で、元和九年京都の窄人拂に幕府が「重而奉公可仕と存候窄人可拂事」と令した所以である。金戒光明寺文書。されば幕府も大阪陣以後は極力窄人の抑壓に努め、或はその居住についても制限を加へ、或は舊主の武家奉公構を公認し、或は元和九年京都に於ける如き窄人拂さへも斷行したのである。^⑤併し唯さへ社會の平和と安定に就職難を啣つた窄人は、更に幕府の抑壓を受けて益々窮迫を加へ、遂に窮して亂するに至つた結果が、慶安、承應の窄人騒動となつたのである。^⑥大名の改易によつて自ら窄人の大量製産を敢てした幕府は、更にこれを抑壓して事變を激成するに至つたのである。茲に於て幕府は慶安の變の直後、窄人政策を改め、一面大名の改易を減じてその發生を防ぐと共に、他面その就職の助成を試みて、その減少を策することとなつた。而してこの大阪陣後に於ける窄人の抑壓と慶安變後に於けるその緩和は、實に江戸幕政の全般的展開の尖端を成したものである。大阪陣以前と雖も根本に於ては幕府に武力、財力を集めて、これにより有ゆる勢力を抑へて行か

うとして居たのであるが、豊臣氏の存在のためこれを露骨に現はさず、その態度は軟弱を免れなかつた。然るに大阪落城後は傳家の寶刀の鞘を拂つて、有ゆる方面に武斷強壓を敢行したのであつたが、慶安變後は漸次武斷より文治へとの展開を示したのである。即ち朝廷の抑制は尊崇となり、大名の強壓は親近となり、人民の搾取は向上開發となり、外國關係も政治的な切支丹禁止よりも經濟的な貿易の調整が主とせられるに至つた。が、その轉向の魁は實に宰人政策の緩和であつたのである。^⑦

宰人の就職を妨げたものは、平和安定に向ふ社會情勢、幕府の政策、殊に武家奉公構の公認の外にも、多數の宰人を召抱へることは大名としては幕府の嫌疑を蒙る懼があり、又譜代の家臣との軋轢の因でもあつた等の事情もあつて、これを突破した就職戦線の勝利者の要素としては、山緒、武功及び藝能が數へられる。山緒には家系、履歷の人的關係もあれば、住地による地的關係もある。家系には名家の後であり、勇士の子孫たるものもあれば、女縁による御腹一類等もある。履歷は嘗て相當な地位にあつたこと、何等かの事情で知られて居たこと等があり、舊主に歸參するものもその著しい一つである。住地によるものは新に封せられた領内に住したもので、所謂先方衆である。武士の最も名譽とする戦場の武功が重んぜられたことはいふまでもない所で、關ヶ原宰人、大阪宰人の持囃された所以であり、その結果は互に證人となつて武功を偽造するものまで生せしめた。注意すべきは戰場に於て實際又を交へた相手の家に召抱へられたものも多きことで、美しい武士道の發露である。併し山緒は

求めて得られず、武功も泰平の世には期待すべくもないから、最後に残されたものは藝能であつた。藝能の主なるものは武藝と學問であつて、寛永前後に敢て弓馬・劍槍・柔術・兵法等の諸流派が競ひ起つた原因の一半も茲に存するが、學問に於ても佐久間立齋が「文學を習ひて小祿にも取つかんと思ふものならで學ぶ者甚だ鮮罕なり」と言へる如く、窄人の就職運動がその興隆の一因であつたことは争はれぬ^⑤。而して茲に本題たる近世文化と窄人との契機が見出されるのである。

近世の文化、殊に學問・藝術が、從來の公家・僧侶及び武士の一部に行はれたに反し、武士は固より百姓・町人にまで普及した意味に於て、これを國民文化と稱するは異議のない所であり、文學の如き新展開を見た方面は町人本位の傾向が著しいため町人文學と呼ばれることも必ずしも否定すべきではない。併し少くとも近世文化の最も順潮な發展を見た前期に於ては、文化の創造者として最も貢獻したものは武士階級であり、殊に窄人又は準窄人であつたと自分は信ずる。

窄人の文化創造への貢獻は前述の如く、その就職運動の一部でもある。併し決してそのみではない。學問・藝術によつて生活の資を得んとしたのもあり、初めは就職又は生活のためか、單に好尚教養のためその道に入つても、遂に一身をこれに捧げ、學問・藝術そのものを目的とするに至つたものも頗る多い。されば窄人が近世文化の創造に最も貢獻したのは、藝能が就職の要素であつたことが、彼等をしてこれに向はしむる機縁となつたには相違ないが、寧ろ當時武士階級が百姓・町人の平

民階級に比し一般に教養の高かつたこと、而して宰人は有祿の士の如く政事・軍事の上に活動が許されなため他の方面に活路を求めたこと、及び有祿の士に比し、行動が自由であつて、藝能に専心精進せしめ得たこと等がその主なる原因と見らるべきであらう。以下近世前期に於ける學問藝術、特に儒學・史學・地理學、醫學、本草學・文藝等に於ける宰人の貢獻の如何に著しきかを實例について檢して見よう。

- 註
- ① 歴史と地理、第十三卷第一號所載、拙稿「宰人の意義」。
 - ② 社會學雜誌、第二十七・八號所載、拙稿「江戸時代初期に於ける宰人の發生に就いて」。
 - ③ 歴史地理、日本兵制史號所載、拙稿「大坂陣と宰人問題」。
 - ④ 中央史壇、第十卷第一號所載、拙稿「島原の亂と宰人問題」。
 - ⑤ 史學雜誌、第三十六編第六號所載、拙稿「江戸幕府の宰人政策」。
 - ⑥ 中央史壇、第十二卷第二・三號所載、拙稿「慶安承應の宰人騒動」。
 - ⑦ 拙著「綜合日本史大系江戸時代上」第四章文治政治の展開。
 - ⑧ 「同上」第五章社會階級の構成、第一章武士階級、九宰人。

二、儒學と宰人

近世に於ける文化の中樞として、上代の藝術、中世の宗教の位置を占めるものは學術であつた。固より現代の學術は内容に於て近世を凌ぐに相違ないが、その尊重及び尊重の結果としての政治・宗教・藝術等に對する影響に於ては、現代は近世に比べて遺憾ながら及ばざること遠いと言はざるを得ない。

而して近世に於ける學術の尊重が窄人をして主として學術に向はしめた一因でもあつた。

近世に於ける學術の中心は儒學であり、前期に於て殊にそれが著しかつたが、儒學の中最も早く起り、最も廣く行はれたものは朱子學であり、これに次いで起つたのは陽明學であり、その後新に我が國に起つて近世の中期に最も榮えたのは古學であつた。^①

近世儒學の祖であり、朱子學の天下に弘まる基を成した藤原惺窩は公家たる冷泉家の出であるが、その父參議爲純は家領播磨國細川莊を別所長治に犯され、これを防いで敗死して居るから、彼は公家窄人とも言ふべきであつた。惺窩先生行狀、同系譜略、冷泉家傳。惺窩門の四天王たる林羅山、松永尺五、那波活所、堀杏庵

は共に窄人又はその後であつた。羅山は加賀の土豪の後と傳へ、祖父又右衛門正勝の時紀伊に移り、父彌次右衛門信時はその兄で羅山の養父たる左近衛門吉勝と共に大阪に出て、更に京に移り住んだ人で、彼等の事蹟は詳でないが窄人であつたことは疑あるまい。羅山先生年譜、同行狀、寛政重修諸家譜卷七百七十。松永尺五は貞門俳

諧の祖たる貞徳の子で、尺五の行狀に貞徳を松永彈正久秀の孫とせる説は疑しいにしても、その一族たることは明である。文藝の項參照。那波活所は播磨赤松氏の後と傳へ、熊本の加藤忠廣に聘せられたが、久

しからずして致仕し、後紀伊頼宣に仕へるまで十數年間は窄人であつた。堀杏庵は近江野洲郡野村の城主で佐々木氏に仕へた伊豆守定澄の孫であるが、父孫七郎貞氏は幼にして僧となり、後還俗して醫となつたため、彼も儒醫を兼ねて淺野幸長に仕へ。五百、石後尾張義直に聘せられた(七百石) 杏庵年譜稿本、日本古今人物

史、皇國名醫傳、
名古屋市史學藝編

士として徳川家に仕へた旗本であり、大阪夏の陣には病を冒して従軍し、戦功著しかつたが、軍令に反したため賞に與らず、遂に窄人して京に上り、一時母を養ふため廣島の淺野家に仕へたが、母の死と共に去つて洛北詩仙堂に閑居を樂んだ。墓誌銘、東溪先生行狀、石川丈山先生年譜

林羅山の系統中、著名な學者で窄人の性質を有するものは菊池耕齋、向井玄外、松浦交翠、井上蘭臺、岡島冠山等がある。菊池耕齋は肥後の菊池氏の後と傳へ、祖父七兵衛武茂は小田原北條氏に仕へ、落城後は北條氏直に従つて高野山に入り、氏直の死後もその孤兒を京都で養つたといふ。父元春は儒を以て本多家西尾、龜山、勝所等に移封に仕へ、彼も儒を羅山に醫を野間玄琢に學んで有馬氏の聘に應じたが、後父母を養ふため辭して京に歸り、晩年再び島津家に仕へた。五百石、菊池耕齋先生略傳。向井玄外も羅山に學び、且醫名の

高つた人であるが、曾祖父左近將監高圓は肥後神崎郡の城主で龍造寺氏に城を陥れられてから土豪となつた家で、父兼義に至つて病のため長崎に移つたのである。松浦交翠は姫路城主松平大和守直矩に仕へ、主命により林鴛峰に學んだが、主君の死後意を官途に絶ち、講説を以て聞えた。井上蘭臺は幕醫通翁の子で、兄が家を繼いだため儒を以て立ち、後岡山の池田家に聘されたが、林鳳岡の門に出でながらその學は却つて徂徠に近く、その門下に折衷學を開いた井上金峨を出すに至つた。岡島冠山は毛利家の唐通事であつたが、辭して鳳岡に學び、一時足利の戸田大隅守忠圓に仕へたが程なく辭して

講説に従ひ、支那語及び支那小説を傳へたことに於て卓出した。

松永尺五の系統では森嚴塾・新井白石、松浦霞沼・向井滄洲・板倉復軒があり、那波活所の門に鶴飼石齋があり、菅玄同の門に人見卜幽軒があつたが、森嚴塾・新井白石・人見卜幽軒は史學の項に譲る。松浦霞沼は木下順庵に學んで最も詩文に長じ、對馬の宗家に仕へて朝鮮來聘のことを司り、藩命を受け、通交大紀^{五十卷}、宗氏家譜^{三十卷}以下編著頗る多かつたが、父彌五右衛門は姫路の松平大和守直矩に仕へ、故あつて致仕した窄人であつた。向井滄洲は順庵及び同門の高足柳川震澤に學び、後順庵の命で震澤の嗣となつた人で、その父休寛は醫を以て桑名及び高槻に仕へ、後致仕して京に住した。板倉復軒の曾祖父佐渡守清治は北條窄人であり、父正信は二兄と共に徳川氏に召出されたが、彼は四子でそれに洩れ、後順庵の推舉によつて甲府綱豊に仕へ、主君に従つて幕府に入り、稀に見る廉直恪勤の人であつた。鶴飼石齋は那波活所に學び尼崎の青山大膳亮幸和に仕へること十四年に及んで致仕し、京に歸つて漢籍の和訓本の刊行を業とした。その二子練齋・稱齋は共に水戸家に仕へた。

朱子學中、惺窩の系統に對し一敵國をなした南學は土佐の谷時中に起るが、これを天下に弘めたのは山崎闇齋の力であつた。闇齋の父三右衛門長吉は若狹高濱の木下宮内少輔利房に仕へ、利房が關ヶ原陣に西軍に加はつて領地を失つた後もよく奉仕して孤忠を盡くしたが、後利房が大坂陣に従軍した功によつて備中足守^{二萬五千石}に封せられた後、窄人して淨因と稱し、京で鍼醫を業とした人で、義理名

分を強調した闇齋の父たるに恥ぢぬ人であつた。山崎家譜、山崎闇齋。行實、闇齋先生年譜。 崎門の三傑中淺見綱齋は武士出身

ではなく、京の豪富で醫を業としたが、自ら馬に騎り、劍を揮ひ、處士を以て居つた。佐藤直方の父

五郎兵衛は備後福山の水野家の舊臣であり、彼も一時水野家に仕へたが久しからずして辭し、晩年厩

橋の酒井家の聘に應じ、賓禮を以て遇された。^③ 三宅尙齋は武州忍の阿部家に仕へたが十年にして言行

はれざるため病に托して致仕を請ひ、許されずして猶屢々これを繰り返したため獄に投せられること

三年にして放逐せられた。遺事。 猶崎門の先輩の凋落した後、最も聲名の高かつた稻葉迂齋は旗本鈴木

五郎左衛門の子であつたが、三男に生れたため祿を得ず、佐藤直方に學び、その推舉で唐津の土井大

炊頭利實に仕へたのである。迂齋。行實。

惺窩、時中の系統以外にも筆人朱子學者は少くない。百歳の長壽を保ち後水尾天皇から鳩杖を賜つ

た江村專齋は朱子學と共に醫を修めて加藤清正に聘せられ石五百たが、清正の死後辭して京に歸つた人

であり、その曾祖父民部大輔孝興は播州三石城主で、別所氏の三木城陥落の際、脱れて京に隠れたと

いふ。後光明天皇に朱子學を進講した朝山意村庵は織田信長の皇居造營に盡力した日乘上人の孫であ

り、九條家の諸大夫宮内少輔久綱の次男であるが、一時小倉の細川忠利及び駿府の徳川忠長に仕へ、

其に久しからずして辭して京に歸つた人である。^④ 後藤松軒は熊本の細川家に仕へたが、高原陣に銃丸

を眼に受けて失明したため、致仕して朱子學で一家を成し、藤井懶齋は醫を以て久留米の有馬家に仕

へて居たが、後辭して専ら朱子學を修めた。三山伯養は初め豊後竹田の中川家に仕へ、白田畏齋は岡山の池田家の老臣の用人であつたが、共に辭して京都で藥を賣つて生計とし、専ら朱子學を修めたのであつた。

朱子學に次いで起つた陽明學を以て前期に大名のあつたのは首唱者たる中江藤樹とその弟子熊澤蕃山の二人のみであつて、共に明に宰人であつた。藤樹の父は近江國高島郡小川村の百姓吉次であるが、彼は祖父吉永の養子として伊豫大洲の加藤家に仕へ、母を養ふため致仕を請ひ、許されずして官を捨て、小川村に歸つたのである。藤樹先生行狀、同年譜、同。逸事、藤樹年譜、同行狀。蕃山は岡山の池田光政に仕へ五千、國政に

任じたが、權勢の地位に久しく居るべからざるを察し、致仕して京に出て講筵を開き、幕府の忌諱に觸れて京を追はれ、晩年には、下總の古河に幽閉されたことは著名な事實である。熊澤先生行狀記、蕃山實錄、墓賢錄、熊澤伯繼傳、蕃山考等。

近世古學の首唱者山鹿素行の父六右衛門高直は伊勢龜山の城主關長門守に仕へたが二百、同僚を殺したため出奔して會津城主蒲生忠郷の老臣町田左近三萬石に身を寄せた所、忠郷が死んで嗣子がなく家絶

え、町田左近は幕府に召出されたため、醫者となつて玄庵と號した人である。素行は軍學・儒學等を講じて大名あり、播州赤穂の淺野内匠頭長友に仕へること千石、八年にして致仕して江戸に歸つて益々名

聲を高めたが、聖教要録を出して朱子學を佛道の餘臭として排斥し、道統の傳宋に至つて泯滅すと叫び、儒學の復古を主張したため、舊主淺野家に預けられること十年に及んだのであつた。家譜（自叙傳）、山鹿子由來記、

素行先生實傳、。彼の弟子として最も知られる味木立軒は後廣島の淺野氏に仕へたが、その祖父は大坂宰人であり、父は兵學者であるから、宰人出身である。

素行と同時に京都で古學を唱へた伊藤仁齋は町家の出であるためかその門にも宰人は乏しいが、第一の高弟たる中江岷山は瀧川一益の從兄弟但馬守一成の曾孫で、伊賀の郷士出であり誌、仁齋の子東涯の門には豊後日出の木下家の近臣で、重役と争を生じて宰人した原東岳、彦根の井伊家の舊臣で、心疾のため祿に離れた澤村琴所、丹後宮津の奥平家の舊臣陶山南壽等の宰人儒者があつた。

東涯と時を同じくして江戸に古文辭學を唱へ、遂に一世を風靡した荻生徂徠の父方庵は將軍綱吉の侍醫で、罪を得て上總に流されたため、徂徠も十數年配所に父に從つたが、後許されて江戸に出で柳澤吉保に仕へた石五百のである物徂徠年譜、徂徠事、徂徠先生墓誌。徂徠門の所謂謔園八子の中、太宰春臺は父言辰が信州飯田の堀家の鐵砲頭石二百で、事により祿を放たれて江戸に出た人であり、彼も但馬出石の松平伊賀守

忠徳に仕へ、主君の意に反して致仕して十年間武家奉公構に逢ひ、後一時下總生實の森川家へ仕へた外處士を以て終つた春臺先生墓誌、同、墓誌、同行狀。服部南郭及び安藤東野は共に初め柳澤吉保に仕へ、後辭して再び祿仕しなかつたが、南郭の祖先は尾張の津島七黨の一であり、東野は黒羽の藩醫の子で幼にして孤になつた人であつた。

註 ① 原念齋の先哲叢談、東條琴臺の同後編、續編、原德齋の先哲偉傳等儒者の傳記集に見ゆるものは一々註記するを省く。

- ② 和田英松博士著、「藥備の學者」二、佐藤直方。
③ 史學雜誌、第二十三編第四號所載、三浦周行博士、「後光明天皇の御好學と朝山意村庵」。

三、史學と宰人

史學は我が國に於て最も早く發達した學術であつて、上代に於て既に獨自の展開を示したが、近世殊にその前期には儒學との關係が深く、史家は殆ど儒者たる有様であつた。^①當時は幕府、諸藩の事業としても、學者の撰述としても、修史は著しき發展を見た。幕府の修史の最も主なるものは最初の武家系圖たる寛永諸家系圖傳三百七十二卷と編年體通史の第一たる本朝通鑑三百十卷であり、その他には家康の事蹟を記した武徳大成記三十卷があつた。これ等は林羅山、その子鷲峰、孫鳳岡等が編輯を總べ、堀杏庵・人見卜幽軒・同友元等が主としてこれに與つた。羅山は寛永系圖及び本朝通鑑の初たる本朝編年録の編輯を總べた外、本朝將軍家譜等の修史の撰述も少からず、堀杏庵は寛永系圖の外尾張義直の神君年譜、類從日本紀の編輯にも與り、自ら日本後記の缺佚を補ひ、寛永譜系及び朝鮮征伐記をも著したが、彼等の宰人の後たることは既に述べた。^{參 儒學の項}人見卜幽軒の曾祖父道嘉は細川晴元に仕へ、三好長慶と戰つて敗死し、祖父道西は騎射に長じ、豪傑流落の人で、晩年嵯峨に隱れたが、父友徳は京に出て醫となつた。彼は惺窩門の菅得庵に學んで水戸頼房に仕へ、本朝通鑑の校訂に與つた人見友。人見友元は卜幽軒の弟で醫を以て朝廷に仕へた道伯の子で、羅山に學んで幕府の儒官となつたのである。^{人見友軒傳、人見家傳}。されば彼等の修史に關係したのは仕官の後であり、羅山の外は悉く醫者の子

であるが、少くも二三代前には何れも武人であり宰人であつた。

大日本史は幕府の本朝通鑑と共に近世の二大修史たるのみならず、その皇統を正し名分を明にせんとする大理想に於て、明暦大火の直後に着手し、一藩の財力を傾けてこれを完成せんとした意氣に於て、博く史料を採訪し、史籍を校訂して考證の精確を期した點に於て、支那の正史そのまゝの紀傳體を取り、行文亦推敲を盡くした點に於て、一般に國史の尊重すべきを知らしめ、その研究を盛ならしめた點に於て、且二百五十年の久しきに亙つてよくこれを完成した點に於て、方に空前にして絶後に近いものと言はねばならぬ。併しその缺陷は既に平安時代に同化を見た史體を再び形式主義の支那史體に逆轉せしめたことで、このため編輯の困難を來たしてその完成を遅からしめ、紀傳一度成つて後、猶志表の整備までに二百年の歲月を経過せしめたが、この形式の模倣は思想にも影響し、水戸學派をして朝政の興廢により君徳の隆替を論じ、天皇の神聖を瀆す反國體思想を著しからしめたのは悲しまざるを得ない。大日本史の編輯は二百五十年間に亙るため、これに關係した學者は數十百人に及ぶが、前期に於ける主なる人々は多く他から來り仕へたもので、廣義の宰人出身である。^②即ち大日本史の義例を定め、南行雜錄を著した吉弘元常、義公遺事を著した中村願言、續南行雜錄及び石和見聞志を書いた大串元善、史料の蒐集に最も功績あり、南行雜錄、又續南行雜錄、西行雜錄を編し、足利將軍傳を著した佐々宗淳、二十二社奉幣考の著者酒泉竹軒、保建大記に政治の武門に移る事情を論じて義

理の精を以て稱せられ、倭史後編を著して大日本史の後を繼がんとした栗山潜鋒、中興鑑言に建武中興の得失を論じ、烈士報雙錄に赤穂義士を顯彰した三宅觀瀾、攝關大臣考の著者依田靜庵等は鶴飼練齋・神代鶴洞・大井松隣・佐治竹暉等と共に他より來り仕へて、彰考館總裁に至つた人々であり、總裁にならなかつた人にも開彰考館記を書いた田中止邸、護法資治論を著して儒佛一致を唱へた水戸學派中の異彩森嚴塾を初め新に召抱へられたものの數は固より少くなかつた。就中佐々宗淳の祖父備前守は佐々成政の姉の腹に生れ、その姓を冒して加藤清正に仕へ、蔚山の戰に勇名を擧げた人で、父義齋も加藤忠廣に仕へたがその除封のため牢人し、次いで生駒高俊に仕へ再び主家の改易に逢つて牢人で終つた人であり、彼はそのため少にして禪僧となり後還俗したのである。十竹居士佐々氏碑陰記。酒泉竹軒の父徳左衛門正直は福岡の黒田家の家臣であつたが、彼は幼にして孤となつたため、福岡を去つて長崎に遊學し、後江戸に出て光圀に仕へたのである。三百石。竹軒。酒泉君碑銘。栗山潜鋒の父良節は儒を以て淀の石川家に仕へた人で、彼は八條尙仁親王に仕へ、保建大記は十八歳の時宮に上つたものであるが、宮の薨去に逢つて退去し、京で講説に従つて居て光圀の招聘を受けたのである。

鶴飼練齋の父石齋が攝津尼崎の青山家の舊臣であつたことは既に述べたが、彼は山崎闇齋に學び、弟稱齋と共に光圀に召されたのであつた。佐治竹暉の曾祖父七右衛門は小牧陣に戰死して居り、祖父清右衛尾張義直に仕へたが、父清右衛門の時牢人して紀州新宮に住し、彼は木下順庵に學んで光圀に

仕へたのである。田中止郎は幼にして父を失ひ、早く酒井忠勝に仕へて林羅山に學び儒官に進んだが、母の病を撫養するため致仕し、窄人たること三年で水戸の聘に應じた。森嚴塾は攝津高槻の永井家の藩醫の子であつたが、父の遺言により去つて儒を松永昌易に學んだ人である。

猶この外でも最初の彰考館總裁に任じた人見懋齋は人見卜幽軒の甥で、その養子となつて水戸に仕へた人であり、大日本史の編纂に最も功多く、論贊を書いた上、烈祖成績に家康の事蹟を、義公行實、西山遺事に光圀の事蹟を、文恭先生行實、朱文恭遺事に朱舜の事蹟を記した安積滲伯も、その祖父正信は小笠原忠真に仕へて大阪夏陣に主君の危救を救ひながら、功報はれざるため去つて武家奉公構になつて久しく窄人の苦を嘗め、後水戸頼房に仕へることとなり水戸家に免じて舊主から構を解かれた人であつた。

幕府及び諸侯の修史そのものは固より窄人の事業ではなく、これに與つたものも、その時には祿仕して居たのであるが、その修史のために登用されるに足る學識を養つたのが、多く祿仕前である所に、窄人の修史に對する貢獻を認むべきである。

以上の外その思想・著述・學風により近世の史學史上の最も注意すべきは、山崎闇齋、山鹿素行及び新井白石の三人である。闇齋の窄人の子たることは、前に述べた所であり、彼には修史として大著を遺しては居ないが、倭鑑の編纂を企て、その成功を舍人親王を祀つた藤森社に祈つて居るのみなら

す、その目録によれば神功皇后を歷代に加へず、南朝を正統として北朝をこれに附載し、筆を南北合一に絶つて居る等、全く大日本史と一致し、その先容を成すもので、唯女帝を歷代から除いた所が相違して居るに過ぎない。而して彼の崎門學派の系統から栗山潜鋒・三宅觀瀾・鵜飼練齋を初め水戸の修史に大功のあつた人の續出したのも偶然ではない。

山鹿素行の窄人儒者の典型たることは既に述べたが、彼は史學に於ても中朝事實に神代の傳説を説いて我が國風之美を示して、我が國を中華文明の土と稱し、武家事記に武家の各方面に亙る沿革を記して古文書まで集録し、「記誦之俗學、文墨之腐儒」の「遠諳外國之虛文、近不知本朝之事實、作力最負異域之俗、更不審吾中朝之靈妙超過千萬邦」を慨した。

新井白石の史學は近世に於ける最高峰ともいふべく、研究方法に於て時流に卓出し、史料の範圍を擴大して從來古代に關しては主として日本書紀によつて居たに反し、古事記を主として、書記・舊事記・古語拾遺・風土記等を併せ取る外、支那・朝鮮の史籍をも活用し、更に効果は十分に現はれて居ないが遺物にまで着眼して居り、史料の解釋も文より言語によるべきを喝破して國語學の研究に一大進展をなさしめ、比較法を應用して或は支那の史實と比較し、或は古代の事象を幼兒の行爲に比べて、真相の闡明に資した。而して研究の方面も廣く、武家政治の起源・沿革を明にした讀史餘論の前に古史通・史疑を置き、後に藩翰譜と折たく柴の記を附すれば、神代から當代までを網羅することとな

り、更に制度故實には經邦典例・本朝軍器考があり、外交經濟には外國通信事略・殊號事略・本朝寶貨通用事略があり、言語文字の沿革には同文通考があり、歴史地理には蝦夷志・南島志が數へられるのである。且つ「史は實に據つて事を記して世の鑑戒を示すものなり」古史通讀法として事實の真相の闡明を主として曲庇する所なく、神代の物語をも「神は人なり」と斷じて神事を人事の比喻として論究し、神話の解釋をして思想の表現と見るに至らしめる階梯を成した上、その表現に於ても多く國文を用ゐて叙事の精妙に史筆の範を示したのである。これ明に支那史學を凌駕した日本史學の建設であつて、その影響は兎に角、研究の態度・方法に於ける進歩は、大日本史と雖、遠く及ばざる所であつた。白石の父正濟は上總久留利の土屋家の臣で、彼は父の隱居後土屋家を立退いて武家奉公構に遭ひ、土屋家の改易のため構が解けて大老堀田正俊に召抱へられたが、程なく正俊が殺されて意を得なかつたから、再び窄人し、師木下順庵の推舉によつて甲府綱豐の儒官となり、綱豐の將軍となるに及んで旗本となつたのである。彼の著述は綱豐に仕へて後に出來たが、殊に晩年吉宗の將軍となり彼が幕政から離れて以後に成つたもの及び修正されたものが多いから、窄人中ではないが、彼が十年近く窄人として窮迫時代を送つたことは明である。新井家系、折、たく柴の記。

以上の三人に比し學術的貢獻は著しくないが、その著も早く刊行を見、廣く普及したことに於て注意すべき窄人史家に小瀬甫庵がある。彼は文祿五年補註蒙求を木活字版で刊行し、勅版・寺院版に續

き私版として最初の活字版を出して居るが、慶長八年には年代紀略を、翌九年には信長記を共に活字で刊行し、更に元和三年太閤記を著して居る。年代紀略は略年代記に過ぎぬが、信長記は太田牛一の信長記を敷衍し、太閤記と共に單に事蹟を記すのみならず古今を商榷して得失を論究し、又勸善懲惡に資せんとしたもので、事實を誤ることは少くないが、廣く世に流布したことは、遠く他の史書を凌いだ。彼は美濃の土岐の支流で豊臣秀次に仕へたがその滅亡により窄人し、次いで堀尾吉晴に抱へられたが吉晴の死に逢つて退去し、播磨に住し、後京に移つた。晩年はその子の前田家に醫を以て仕へた縁で、金澤に行つて前田利常に仕へた二百五。甫庵に類するものに小田原落城まで北條氏に仕へて居た三浦五郎左衛門淨心があり、後江戸に住し、北條五代記・慶長見聞集を著した。又川角太閤記の如きも柳川田中家の窄人川角三郎右衛門の作たることが知らるゝに至つた。^④かゝる軍記・聞書・覺書の類には窄人の作の多いことは言ふまでもないが、史學上の價値の著しからざるものが多いから他は省略に従ふ。

註 ① 史家も儒者たるものが多く、儒學の項に擧げた一般的の傳記類に見ゆるものは一々註記するを省く。

② 清水正健氏「補水戸の文籍」にも水戸學者の小傳と著書を掲ぐ。今一々註せず。

③ 史學雜誌、第四十八編第一號所載、桑田忠親氏「川角太閤記考」。桑田氏の説に従へば、本書は元和七年以後で、同九年七月以前の著作になり、田中家は忠政が同六年八月に卒して斷絶してゐるから窄人後の作と見るべきであらう。